

R18
ADULT ONLY
成人向け



著：相山タツヤ

絵：懐良匡

吸血メイドの ご奉仕性交



発売中作品紹介

現実社会は辛い事ばかりだから、
異世界の少女と幸せになろう。



ヒロイン：
エイリス

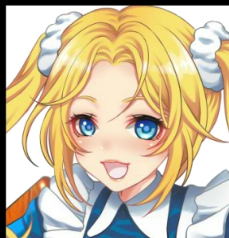
「ブラック社畜と赤ずきん」

クーデレ少女に尽くされたい。

主人公の部屋に突然現れた赤ずきんの少女エイリスとの交流と愛情を描く第一作。ブラック企業勤めで毎日が辛い主人公が、クーデレ気味に尽くしてくれるエイリスとの交流と献身的なHによって、徐々に強い自我を取り戻していく物語が見所です。



睡眠姦/布団で初H/夜の電車でH
お風呂で貪欲フェラ/甘々ご奉仕H



ヒロイン：
メリル

「ゆるふわメイドと機関銃」

ゆるふわ天然メイドに癒されたい。

夜道で拾った異世界メイドとの交流を描くドタバタラブコメディ風の第二作。異世界でクビになったロリ巨乳メイドが、主人公の為に何とか役に立とうと大奮闘。人それぞれで良いじゃないとお互い慰め合いラブラブエッチに過ごすふんわり物語。



無邪気に手コキ/ご奉仕フェラ
ラブラブ初H/朝だけド二回戦



ヒロイン：
エイカ

「その淫魔は雨と共に」

エロいメンヘラと共依存したい。

雨が降りしきる夜の公園で出会った、妖しい黒ずきん少女との危険な愛欲を描く第三作。童貞で孤独な主人公がメンヘラ淫魔少女と流されるままに性交し、それから彼女なしでは生きられないと強い愛着を抱いていく共依存溺愛ダークラブストーリー。純愛です。



雨濡れ騎乗位で童貞喪失/甘々授乳手コキ
貪欲肉食エッチ/お尻で初エッチ

目次

- 第一章『吸血鬼の異世界メイド』……………4
- 第二章『吸血鬼の愛情基準』……………23
- 第三章『吸血鬼の夜は長い』……………58
- 第四章『吸血鬼の新生活』……………79
- あとがき……………89

第一章『吸血鬼の異世界メイド』

「……ハア、疲れた」

この台詞をこぼしたのは、いったい何度目になるだろうか。

俺は夜道を一人孤独に歩いている。

今日も、近所のレンタルビデオ店でアルバイト。年下の上司社員に低賃金で夜までこき使われる毎日。

業務自体は変わり映えのしないルーチンワークで単純だが、だからこそ精神的な疲労と苦痛が際立ってくる。いくら頑張って売上を上げたとしても、昇給やボーナスは

無く、将来性など一ミリも感じない。だが、かといって転職するリスクを懸ける勇氣もない。

こうも不安で独りぼっちだと、無性に人肌が恋しくなる。

俺は一人暮らしの独身で、彼女なんて存在は一度も得たことがない童貞だ。こんな寂しい人生を送る羽目になるなら、学生時代にもっと派手に冒険して遊んでおくべきだったと切実に思う。若さも収入も器量の良さも無い今の俺には、異性との出会いの機会など絶望的だ。

悶々と思い詰めながら、公園の道を歩いていると、先から男女の話し声が聞こえてきた。

……お、これは？

言っでは悪いが、俺が住んでいる地区は治安があまり良いとは言えない。

暴行や盗難などの事件が比較的多く、若いチンピラグループが各所にたまっている光景もよく見る。

しかし、あえて俺がこのいかにも危なそうな夜の公園の道を行くのは、自宅への近道だからという事もあるが、もう一つ別の大きな理由がある。

……今日は、ついにアタリか？

右手にスマートフォンを握った俺は、舗装された道から外れ、姿勢を低くして草むらや木々に隠れながら男女の声の元へと慎重に近づいていく。

この公園では夜、性欲盛んな若いカップルが刺激を求めて絡み合っていることが時折あるのだ。

最後に覗き見たのは二週間ほど前。それは女一人に男二人という組み合わせの3Pで、肉つき豊かなギャルが胸を惜しげもなく晒し出し、前と後ろからペニスで乱暴に突かれ続けた淫靡な光景は、今でも鮮明に思い出せる。しかもコンドームを着けない、

瞳への生中出し。この行為の録画は、国宝級の扱いで大切に保存してある。

あの興奮が再び蘇ってきて、否応なしにズボンの下で勃起が始まってしまう。

だが、耳を澄ませていると、どうにも不穏な様子が聞き取れてくる。男は二人、女は一人だ。

「お姉さんよ、そんなメイドのコスプレして、襲ってほしかったんだろ？」

「そんなわけないでしょ？ 早く手を離して……！」

「へいへい、暴れんなよ！ ここらで見ない顔だな。外人さんか？ 最近引っ越してきたのか？ 運が悪いなあ」

「ふざけないで！ いきなり、どういうつもり？ これ以上やったら許さないわよ」

「ほう、許さないだど？ どうなるのか教えてくれよ、お姉さん」

「嫌っ……触らないでよ……！」

俺は緊張で息を呑む。

近づいて茂みから顔を出して覗いてみると、いかにもチンピラというラフな格好をした二人の男が、一人の女性の両腕を掴んで迫っていた。

女性は、目が覚めるような美女だった。北欧人のような高雅で整った顔立ちをしていて、髪は銀色のショートカット。頭には黒いヘッドドレスを着け、黒一色のワンピースを着ている。そして彼女の胸は、海外のグラビアモデルのように豊満で大きい。

確かに彼女はこの近所では一度も見たことがない。これほどの美人であれば絶対に目立つはずだが。

キャップを被ったチンピラの方が、抵抗する美女をしっかりと捕まえながら、ふと思

いついたように言う。

「そーいやさ……流石に、外人を襲ったらちよつとまずい事になるんじゃないかね？ あれ、国際的にやべえってやつ」

今さら不安がる様子を見せるキャップのチンピラに対し、やや屈強な身体つきの坊主頭のチンピラは、ニヤリと笑みを浮かべる。

「上等じゃねえか。やることはいつも通りだ。告げ口できないようにしてやればいい。国籍が違って、女は女だ」

「ハハッ、そうだな……！ 外人とやるなんて初めてだから、すげえ興奮してきたぜ。早く車に連れてこう！」

その様子を隠れ見ていた俺は、戦慄で呻き声が出そうになる自分の口元を押さえた。

チンピラたちは、この美女を車で誘拐して暴行を働く気だ。早く止めなければ、取り返しがつかないことになる。

しかし俺には腕力も武器もない。どうすればいいのか。

「おねえさん、これが何だか分かるよな？ 痛い思いをしたくないなら大人しくしろよ」

坊主頭のチンピラはズボンのポケットから折り畳みナイフを取り出して、ギラリと光る刃先を美女の喉元に向けた。

それを見た美女は、切れ長の瞳で怒りに満ちた視線を送り返す。

「……殺せるものなら、殺してみなさい。私も容赦しないわよ」

キャップのチンピラが、ズボンのベルトに差していた黒い拳銃を抜いて、美女の頭に突きつける。

「おおっ！　これがいわゆる『くっ、殺せ！』ってやつ？　本当に聞けるとは思わなかったなあ。素直に大人しくして、お互いに気持ち良くなった方がお得だぜ？　抵抗しても痛い目に合うだけだぞ」

「そんなオモチャの銃で、私を殺せるのかしら」

「オ、オモチャじゃねえぞ！　本物だ本物……！　何なら、その足を撃ってやってもいいんだぜ？　言っとくが、俺は何度も人を撃ち殺したことあるんだからな！　本当だぞ！」

「つまらないジョークね。本当に笑えないわ」

「このっ……っ！」

キャップのチンピラが殴りかかろうとしたところで、ついに俺は意を決して茂みから飛び出した。

「——やめろ！！」

本当はもっと声を張り上げるつもりだったが、土壇場で臆してやや尻すぼみな声色になってしまう。

しかしチンピラ二人も思わぬ闖入者の登場に、明らかに動揺した表情になる。

「その人を離せ！ お前らを撮った動画は、警察と大使館に送信してやった！ 車のナンバーも通報済みだ！ 今に、山のように警官が駆けつけてくるぞ！」

全部ハッターだ。実際にそんな事をしている猶予など無かった。だが、ここで時間を掛けてしまえば、本当に取り返しのつかないことになってしまう。今この場で彼女を助けられる人間は、俺しかない。

「……やつ、やべえ……！ 逃げねえと！」

キャップのチンピラはプラスチックのエアガンを放り捨てて我先にと逃げ出す。

坊主頭のチンピラもそれを追って逃げていくかと思いきや、自暴自棄に興奮した顔つきナイフを手に突進してくる。

「この野郎——！」

「嘘ッ?!」

気付いた時には、俺の身体に思い切りチンピラがぶつかって、俺の胸に深々とナイフが突き刺さった。

……あつ。

死を意識した瞬間、全身の力が抜けて、俺は後方にどさりと倒れた。

腹いせの一撃を俺に与えた坊主頭のチンピラは、そのまま逃げていってしまった。

だが意外にも、後悔の感情はなかった。無気力に生きていた自分が、最期にこんな美女の為に命を懸けたのだから、男冥利に尽きる。

「貴方……大丈夫?!」

その美女が悲痛な面持ちで、俺に駆け寄ってきた。こんな時だというのに、彼女が纏っている仄かな花の香りに情欲が掻き立てられる。

「私の為に、こんな……!　すぐに助けるから……!」

「……いや、いいよ……ここで死なせてくれ……英雄になったまま、死にたいんだ……」

最期だからと格好をつけた台詞をこぼしてみるが、美女に軽く頬を叩かれる。

「馬鹿なこと言わないで！ 貴方は絶対に死なせないわ……」

そう言って美女は俺を見つめながら、右手で刺さったナイフのグリップを掴む。

「え……な、何を……」

「私のせいで、本当にごめんなさい……一瞬だけ、我慢して。すぐに終わるから」

言い終えるや否や、美女はナイフを思い切り引き抜いた。鋭い痛みが走り、俺は言葉詰まらせる。

だがさらに恐ろしい事に、美女はそのナイフを、自らの左手に深々と突き刺した。

……どうして?!

異様な光景を目の当たりにしてパニック状態になっていると、美女は痛みにも顔を歪めながら俺の上着をめくって胸の傷口を露出させ、そこへ彼女の血液を垂らしていった。すると傷口が激しい熱を帯び、血液がジュウジュウと泡立ち赤い煙を放って、みるみるうちに胸の傷が小さくなっていき、やがて元通りになってしまった。

「嘘だろ……!!」

俺は驚愕して叫び、胸元をまさぐる。痛みも傷跡もない。

美女は、同様に自身の左手の傷も癒えていくのを見届けてから、改めて俺を切なげな瞳で見つめる。

「……こうなった以上、隠せないわ。私の名前は、ローヤ。見ての通り、私はこの世界の人間じゃない。異世界から飛ばされてきたの。今さっきね」

「何だって……そんな……」

荒唐無稽な話だが、俺の目の前にいる美女が異形の存在であるのは紛れもない事実だ。混乱しきりで絶句する俺に対し、ローヤは言う。

「急にこんな状況でこんなお願いするのは本当に気が引けるけど……私、行くあてが無いの。ずっととは言わないから、少しの間だけ、泊められる場所を貸してくれる……?」

驚きの提案に、俺はまた目を見開く。異形の美女に同棲の申し出をされるなんて、こんな事あるのか。

「この世界の通貨は持っていないけど、タダでは言わないわ。滞在する間、貴方の家の手伝いをしてあげる。それでも嫌だったら、無理せず断ってもいいわ……。さらに迷惑を掛けるのは、私も申し訳ないから……」

「ああ……いや、そんなことない。君みたいな美人が来てくれるなら……いや、口が滑った、違う……困ってる人は放っておけないし」

ローヤは、俺の下心を正確に見据えたように目を細め、フフツと笑う。

「別に……正直になってもいいわよ。恩返しに、私にいろいろされたいのかしら？ やっぱり男って、そんなものね」

「いや！ そんなつもりないって！ そんな邪な気持ちは……」

軽蔑されたと思つて咄嗟に弁明する俺の唇に、ローヤは人差し指をそつと当てる。

「だから、正直になつてもいいって言うてるでしょ……？ 私だって、経験はないけど、貴方と同じようにいろいろ興味はあるのよ？ 貴方みたいにウブな方が、私としても付き合ひやすいわ」

「それってどういう……」

「いいの、いちいち解説させないでよ。それよりほら、立てる？　とりあえずここを離れた方が良いわ」

俺はゆっくりと立ち上がる。身体は無事そのものだが、服にはべったりと血が染み込んでいる。これを着たまま歩くのは非常によろしくない。

「多分だけど、服は脱いだ方がいいわね。誰か殺したのかと誤解されるかも」

「けど、替えの服が無い。家は近いけど……」

「それなら上半身裸の状態で、大胆な男ってテイで帰った方がまだマシだと思うわ」

納得はしていないが、俺自身が通報されてしまうリスクを考えると一応もったもな意見だ。

その場で俺は上着を脱いで上半身裸になった。見栄えのいい勇ましい肉体を持っていたら良かったのだが、それとは反対の凡人の体つきだ。

「その服、貸してくれる？」

ローヤが手を差し出し出してきた、俺は自然に服を渡す。だが考えると、この場には洗濯機なんてない。

何をするのかと見ていると、ローヤは俺の服をギュツとしぼって、そこから滴る血液を口で舐めとり始めた。

「ちよ、ちよっと何してるんだよ！ 変態か……?!」

「ああ、ごめんなさい。貴方の血が乾く前に、無駄にしたくなかったのよ。私が生きる

には、新鮮な血が必要なの」

そこで俺は、ローヤの種族の正体を察する。

ローヤは訝しむ俺の視線を受け取って、自分の口を開いて白い歯を見せつけてきた。人間のものとそう変わらない見た目の犬歯が、次第に形を変えて鋭く伸びて、ついに皮膚を容易に貫けるであろう牙に変化した。

「言い忘れていたわ。私は、貴方の世界の言葉で言うと『吸血鬼』。でも安心して。貴方は殺さないし、他の人間を殺すつもりもない。……やっぱり、私のことが怖い？ やめておく？」

「……いや、まあ、大丈夫だよ」

まさか命懸けで助けた異性が、異世界の吸血鬼だったとは。

俺の人生この先、普通の女性に興味を持たれる事などもはや無いとは思っていたが、

この状況はあまりに飛躍しすぎではないか。

人生は本当に、何が起こるか分からない。

第二章『吸血鬼の愛情基準』

幸いにも自宅へ帰るまでの道中で、他の通行人に出会うことは無かった。

血まみれの姿を見られるよりはマシとはいえ、上半身裸の状態も良からぬ誤解を招きかねない。

しかも、メイドの格好をした吸血鬼の美女との同伴。情報量が多すぎて、処理しきれない。

「お邪魔するわね」

玄関でローヤは履いていた黒いブーツを脱いで、丁寧に揃えた。

異性を初めて自宅に上げたという実感が改めて込み上がってきて、俺はごくりと唾を飲み込む。

「ごめん、狭い部屋だけ……」

「気にしないで。宿を貸してくれるだけでありがたいわ」

足の踏み場がないというほど酷くはないが、床には脱ぎ捨てた服や読み終えた本などが散らばっており、部屋の隅にはゴミが入った袋がまとめられている。ベッドの上のシーツもしわくちゃだ。

椅子という物がないので、俺がいつもしているように、ローヤにもベッドに腰掛けてもらおう形になる。

「それで……どうする？ 泊めてくれる間は、貴方の身の回りのこと、手伝ってあげる」

ローヤは髪をかき上げながら、俺に命令を求めるように見つめてきた。隣に座った俺は、どきまぎしながら言う。

「……とりあえず、シャワー、浴びてきていいかな？ 仕事帰りで汗臭いと思うし……」

「べつに私は気にしてないわ。むしろ、今のままの方が獣っぽくていいと思うけど？」

体臭を褒められて俺はドキリとするが、ここは冷静に思考する。

あれほど人間にとって生臭く嫌悪感のある鮮血を好んで飲む吸血鬼種族であれば、人間とは味覚や嗅覚に相当な違いがあるのだろう。衛生的とは言い難い人間の体臭も、食欲に直結する美味そうな香りを感じるのかもしれない。

「ローヤ……やっぱり、俺を食べる気だったりする？」

「不本意ね。食べないって言ってるでしょう。もし襲う気なら、わざわざ家について行ったりしないでしょ？」

「いや、ごめん……それは、分かってるんだけど……」

俺は詫びながら、自分の首筋を何気なく撫でる。

何故か俺の中に、彼女に血を吸われてみたいという好奇心が湧いてきている。彼女に抱かれ、首に唇をつけて血を吸われたら、どんな感触になるのだろう。まさにこの世のものとは思えない体験に違いない。

「……まさか、私に血を直接吸われないの？ 止めておいた方が良いわよ。私も貴方も、どうなるか分からないから」

「え？ まさか、直接血を吸ったことは無い？」

「ないわ。普段は、冷蔵保存された動物の血を飲むのよ。直接誰かを襲って血を飲んだら犯罪になるわ。吸血鬼の恋人同士なら、愛情表現として互いの血を飲み合ったりはするらしいけどね……」

「そうなのか……」

確かに、現代の人間だって肉を食うが、わざわざ動物を狩ってその場で食べるわけではないし、よもや同じ人間の肉を喰おうとするなどまさに禁忌だ。異世界とはいえ、案外、倫理観は似通ったものなのだなと関心する。

「……ちなみに、俺の血の味、どうだった？」

つい摩訶不思議な質問をしてしまう。

ローヤは少し驚いたように目を丸くしてから、悪戯っぽく笑みを作る。

「気になるの……？　すごく、美味しかったわ。まったりとしてコクがあって、心地よい色んな後味がずっと口に残る感じ。今でも、貴方の味を舌で感じるわ」

妙に官能的な表現をされて、俺は急に恥ずかしくなって顔を逸らす。

「そ、そうか……口に合ったのなら、幸いだよ。全然、健康的とは程遠い生活を送ってたはずなんだけどな」

「だからこそ、味に深みがあるのよ。わたしの好みが元々ちょっと変わっているのもあるけど……私は、こんな血の方が好きよ」

好きと言われ、俺は再びドキリとする。血の味を褒められただけだが、やっぱりこんな美女に親密な言葉を掛けられると嬉しい。

密室で男女二人という状況への意識が高まってきて、股間がピクリと反応を始めてしまう。

「……そんなに気に入ってくれたなら、もっと飲んでも、構わないよ」

そんな事を言ってみるが、ローヤはゆっくりと首を横に振る。

「気持ち嬉しいけど、そこまでの迷惑は掛けられないわ。刺されて血液を失ったばかりなのよ？ さらに貰うなんて出来ないわよ……」

「そ、そうか。そうだよな……」

「それに私たち……まだ、恋人同士じゃないでしょ……？」

俺は赤面する。相手の血を直接飲むという行為が彼女の種族の愛情表現にあたるなら、俺はいま求愛行為をしたに等しい。

緊張で身体を火照らせながら、俺はおずおずとローヤの顔を見ると、彼女も頬をわ

ずかに赤らめている。

そのまましばらく無言で見つめ合い、徐々に吸い寄せられるように、互いに顔を近づけていく。

そしてついに、彼女の唇が合わさった。柔らかく温かい湿り気のある唇が、ぴったりとくっつく。

心が解れていくような心地よい感覚に浸り、そのままずっと唇を合わせ続ける。

「……は……あ……」

やがて、ローヤは熱い吐息を鳴らして、俺から唇を離れた。うっとり俺を見つめてくる。

「キス、しちゃったわね……」

「……そうだな……あの、急すぎて、ごめん……」

「いいの……私も、いろいろ、興味はあったから。貴方のこと、気に入っちゃったし」

「え、本当に……?」

「ええ。それに……貴方も童貞でしょ? このベッド、貴方の匂いしかしないから分かるの。その方が、私は好きよ。他の女を卑猥に触った手で触れられるのは絶対に嫌なのよ。だから今のところ、私の理想にぴったりかなあと思って……」

ローヤは再びキスをせがむように、顔を近づけてくる。

もう余計なことを考える余裕はなかった。俺は彼女の肩を抱き、二度目のキスをする。

今度はローヤの方から唇を開いて舌を出してきた。自分の舌と舐め合わせると、彼女の熱くぬめった粘膜の感触が直接伝わってきて、言いようのない快感が込み上がってくる。そのまま濡れた舌を絡め合わせ、口内を互いに舐め合う、激しいディープリキスを続ける。

「んう……ちゅっ……はぁ……」

息継ぎのために唇をいったん離し、熱のこもった視線で間近に見つめ合って、さらにキスをする。

ローヤが俺の背中に腕をまわして抱きつき、豊満な胸をぎゅっと押しつけてきて、俺の情欲はさらに高まる。

我慢できず、俺は右手で彼女の乳房に触れた。

「あっ……そこはっ……」

ワンピースと下着越しだが、まるでお湯の入った風船のようにとても柔らかく張りがあり、触っていて気持ち良い。優しくこねてみると、ローヤは羞恥で切なげに喘ぐ。

「んんっ……駄目っ……はあっ……」

先端の尖った感触の部分をつまむと、彼女はビクッと身体を震えさせた。クールな雰囲気醸していた彼女が今、俺の手によって快楽に悶えている。

ズボンの下で俺の肉棒はすでに固くそそり立っており、暴発寸前の様相だった。彼女の体内で、果ててしまいたい。そんな強い欲求が俺を突き動かそうとしている。

しかし、彼女も処女だ。乱暴には出来ない。一握りの理性が、俺を踏みとどまらせる。

「……ねえ……もう、出したいの……?」

俺の思考を察したように、ローヤはとろけた瞳で俺を見つめながら、股間をさする。

「いや……まだ、大丈夫……多分……」

「無理しないで。分かるわ。雄の匂いが強くなってる……射精、したいんでしょ……？」

ローヤは急に吸血鬼の目つきになって、俺の身体をベッドに押し倒した。

そして躊躇なく俺の乳首に甘噛みしてきて、俺は痛気持ちいい未知の刺激に悶える。

「あのっ……ローヤ……ほんとに初めて……？」

「そうよ……？ でも、興味だけはすぐあったから、色々見たのよ。貴方の本棚に入ってるエッチな本みたいな、ね……」

すっかりスイッチが入った様子のローヤは、俺の乳首を弄り転がしてから、舌を蛇のように胸元から腹まで這わせ、やがて俺の股間に顔を埋めた。怒張した亀頭をズボン越しに啜えられ、俺はたまらず呻く。

「ねえ……美味しそうな匂いがするわ……貴方のココ、舐めても、いいわよね……？」

「い、いいのか……？」

「私が貴方が欲しいのよ。我慢できなくなったら、私の口の中に出して」

ローヤは俺のズボンとパンツを強引にずり降ろして、勃起したペニスを露出させた。

「んんっ、すごい匂い……たまらないわ……」

彼女は恍惚とした表情でペニスを掴み、濡れた舌をべろんと出して、亀頭にねっとりと言わせ始めた。

「ううっ……！」

敏感な粘膜が刺激され、俺は短い悲鳴を上げた。熱く煮えた精子が込み上がってくる感覚が分かる。

どうにか射精を堪えている俺を、ローヤはやや加虐的な眼差しで見つめる。

「いい顔……気持ちいい？ もっとしてあげる……」

そう艶っぽく言ってローヤは、今度は肉棒の裏筋を舌で舐め下ろして行って、それから俺の陰囊を唇でついばみ、飴玉のように睾丸を舌で転がし始める。悶え続ける俺の反応を時折愉しみながら、陰囊を舌でくにくくにゆくと弄んで唾液まみれにしていく。

「くっ……口、ローヤ……それ以上は、やばい……」

「止めてほしい……？ でも貴方のココは、そう言っていないわね……」

それから彼女は再び舌を根元から這い上げていき、俺の亀頭にちゅうっとキスをしてから、ペニスを唇の奥へと導き、しゃぶりはじめた。

「……………あっ……………！」

じゅぷ、じゅるっ、という卑猥な抽送音が響き、俺は凄まじい未知の快楽に吞まれて成す術もない。

ただの前戯とは到底思えない、熱くぬかるんだ肉の中へと挿入する性交の感触そのものだ。

舌が独立した生き物のように蠢いて俺のペニスにまとわりつき、唇が適度な締めつけを与えて射精を促してきて、喉肉はまるで子宮のように亀頭を包んで迎え入れてくる。そしてこの目には、俺のペニスを一心に啜え込んで精をせがむ美女が映っている。こんな体験、童貞に我慢できるはずがない。

「ああっ、イク……………！」

それを聞いたローヤは、ペニスの根元を指で激しく擦りながら、頬をすぼめて唇でじゅるると先端を吸い上げてきた。

とうとう限界に達し、俺は彼女の口のナカへと熱い精子を勢いよく放った。出してもし出しても精の奔流は止まらない。意識が押し流されそうな勢いの射精が続き、彼女はそれを恍惚とした表情で受け止めて飲み込み続ける。

やがて射精が終わってからも、一滴も逃さないという風にローヤは俺のペニスをねぶり続け、尿道を強く啜る。敏感になっている所への激しい追いうちに、俺は悲鳴に近い声を上げる。

「も、もう、やめて……！ 限界だ……！」

ギブアップ宣言をすると、ローヤはようやくその唇から濡れたペニスをちゅぽんつと離れた。

「ああん……素敵だったわ……すごく美味しい……クセになりそう」

名残惜しそうに彼女は、再び舌先で軽くペニスを刺激する。

「も……もう出ない……許して……」

俺は息を荒く吐いてぐったりとするが、ローヤは俺の身体に押し掛かって這い上ってきて、俺の顔に熱い息を吐きかける。

「……一人だけ気持ちよくなって、それでお終い……?」

すっかり興奮しきった顔つきでローヤは舌なめずりをしてから、俺の唇にかぶりつくようにキスをしてくる。

互いの唾液をぐちゅぐちゅに混ぜ合う獣のような口づけの後、俺の額に浮かぶ汗を舌で卑猥に舐めとって、間近に見つめてくる。

「ねえ……私も、身体が熱いの……。私のことも、気持ちよくしてくれる……？」

その妖艶な目つきには、有無を言わさない吸血鬼の迫力があつた。

「……わ、分かった……」

「ごめんね……？　なんか、私が主導権握ってるみたいで……」

ローヤはいったん身体を離し、ベッドに座って自分が着ている黒のワンピースのボタンを解いていく。

「今度は、貴方の好きなようにしていいわ……。私の胸、興味あるんでしょう？」

ローヤはボタンを外したワンピースをはらりと落として、その陶器のような美しい

肌をさらけ出した。彼女の花のような香りがふわっと広がった。

大きい胸を覆う黒のレースのブラジャーと、紐で留められた色っぽい黒のパンティが、彼女の白い身体との絶妙なコントラストになって、俺の欲求をさらに掻き立ててくる。

ペニスが、雌を求めて再び立ち上がり始めた。

「……そんなにじろじろ見られたら、ちょっと恥ずかしいわ」

「かなり、大胆な下着だね……。あの、本当に初めて……?」

「失礼ね。下着は、男に見せる前提で着けるものじゃないの。自分が好きだから着けるのよ。処女っぽくなくて、悪い……?」

少しへそを曲げるローヤ。俺はすぐに詫びる。

「そんなことない！ 綺麗だよ」

「なら、もっと触って……」

ローヤが身を寄せてきたので、俺は彼女を抱きしめて、キスをした。

その唇をゆっくりと、首筋に降ろしていき、やがて彼女の胸に当て、そのまま豊満な谷間に顔を埋める。

温かく、柔らかく、いい匂いがして、とにかく幸せな心地だ。

「直接、触って……ね？」

ローヤはブラジャーのホックを外して、乳房をあらわにした。

豊かに膨らむ彼女の胸は形も美しく整っていて、その先端の、興奮で固くなった桃色の乳首に、俺の視線は強く誘われた。

俺は躊躇うことなく、眼前に差し出されたそれに口をつけた。

「……………んっ！」

乳首を口に含むと、ローヤは身体をビクッと震わせた。

本能のままに乳首をちゅっと吸って舐め転がし、同時にもう片方の乳房を手で揉みしだいた。まさしく五感全てで彼女を味わっている感覚だ。

「いやっ……………くすぐったいわ……………」

舌で片方の乳輪を焦らすように刺激しながら、もう一方の乳首は指を使ってこねまわす。

「はぁん……………貴方こそ……………本当に、初めてなの……………？ 手つきがいやらしすぎ……………」

「AVで見たとおりにやってるだけだ……」

舌と手で彼女の乳房を弄り尽くしてから、再びその胸の谷間に顔を埋め、頬ずりする。

「んっ……やっぱり胸、大好きなのね……?」

ローヤは自ら俺の頭を抱きしめて、胸をぎゅうっと押しつける。

「……嫌いな男なんていないよ」

乳圧で息苦しいが、彼女の温かさに包み込まれて最高に幸せだ。このまま死んでも悔いは無い。

「ねえ……胸もいいけど……下も、触って……?」

「いいのか……?」

「ここまで来て、嫌なわけないでしょ……? 疼いて、たまらないの」

俺は顔を上げ、ローヤにキスをしながら、ゆっくりと右手で彼女のお腹を触り、そのまま滑り下ろしていくようにパンティーに指を潜らせた。

試読版は以上です。続きは本編で！

ガンスミス・アイヤマ

